

広島大教育 住田 和子

1. 本研究は新しい家庭教育の確立こそ今日の課せられた緊要な問題と思ひ、毎日の家庭生活を広く“教育する”という立場から考えて私達は、もっと深く時代を見つめ家庭や社会の実態をとらえ、子供を本当に理解してそれに基づいて新しい家庭教育の内容、方法を考えてみようと思ひ、まず家庭教育に対する現代社会の実態をとらえようと思ひました。

2. このアプローチの最初の試みの一つとして、家庭教育に対する社会的態度の測定をおこないました。これにはサーストンの態度測定を用い家庭教育に対する態度や意見を性差、年代差、学歴差から検討してみました。これは家庭教育に対する態度や意見を「非常に好意的」から「非常に非好意的」にいたる単一なる連続上の上に位置づけ、それらを等しい単位で等間隔に区分して尺度化するのです。これを用いてある個人の家庭教育に対する好意度を量的に表現し得るのみでなく、また、それらを個々人の値の代表値によって、その集団の一般的な傾向をも量的に表現できるのです。被験者は既婚者の20代、30代、40代、50代以上の男女である。

3. 成果として態度測定による全体を通してのその得点の平均は3.8であり、これより家庭教育に対する一般の人々の意見は中位よりもかなり好意的な方向に傾いているといえよう。性差、学歴差、年代差、各意見の選択比率、列位の相関は紙面の都合上ここでは省略する。